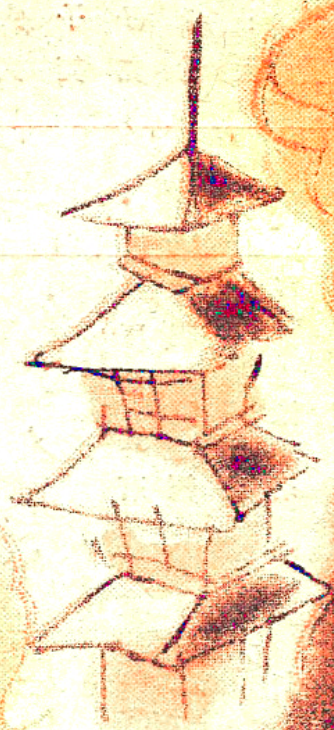


荻原井泉水主宰

雨日

九月號



有隣亭蔵書

目次

涼風……………	井泉	水一
客を待つ……………	井泉	水二
小言……………	井泉	水二
淺間山麓(句)……………	井泉	水三
添へ書……………	井泉	水三
麗日壇(句)……………	井泉	水四
山莊雜記……………	井泉	水四
隨處爲客……………	井手逸朗	三
野火(句)……………	魚眠	洞八
港の雨(句)……………	黎々	火八
けふの日(句)……………	千秋	子五
頰杖(句)……………	陶抄	子五
清露抄……………	井泉	水三
明月壇(句)……………	井手逸朗	三
第二の青春……………	井手逸朗	六
句會通信……………	井手逸朗	三
表紙……………	小玉邦彦	三
裏……………	別車博資	三

荻原井泉水著隨筆集

耳順の書 價五〇圓

青天の書、身邊の書……につゞく、層雲扉全集の一であつて、著者還暦の紀念出版でもある。その靜かなる意味を味讀せられたい。

荻原井泉水著標註

芭蕉選集 價四〇圓

芭蕉の俳句と俳文の解説書は種々あるがこの著者によるこの書によつてこそ芭蕉の深奥に到達できる。俳句に親しむ者の必携の書である。

荻原井泉水著

アメリカ紀行 價四五圓

原田實著 俳聖芭蕉(上) 價二〇圓

花岡謙二編 日本植物歌集 價三〇圓

花岡謙二編 日本動物歌集 價三〇圓

井上康文著 詩集山上の蝶 價二〇圓

いづれも送料五圓、御送金次第お送りします。

東京日本橋蛸町三丁目 不動ビル

寺本書房

層 雲

昭和22年9月

第35卷第3號 (通卷408號)

涼 風

井 泉 水

朝のすゞしいうちに、小諸の公園を散歩した。——「小諸なる古城のほとり、雲し
ろく遊かなしむ……」と鳥崎藤村の夕高い詩にふる、その古城の跡が公園になつて
ゐて、その詩が碑に刻せられてゐる。そして、其の詩碑守りと云々た風な場所に、M
の庵がある。私は、そこに立寄つた。こゝへは藤村も来たことがあつて、深草亭とい
ふ命名のいはれが藤村の筆で書いてかけてある。「城春にして草木深し」といふ杜牧
の詩に因んだものであるだけに、「國破れて山河あり」の今日、感さらに深い。淺間の
山、千曲の河、これは昔ながらに涼しいのである。Mは茶をいれて、信州らしい漬物
を出してくれた。私は——

「藤村がなくなつてから三年位になりますかね、たしか暑いさかりでしたね」
「さうでした。大磯のお葬式に私はありましたが、せまいお家でした、ほんのかり
の住居のおつもりだったのでせう、然し、先生は大そう氣に入つてゐられたので
した」

Mは云つた。私は、藤村とは會合の席上で二三回、逢つたことがあるが、温厚な人
からは、二言三言話すうちにもうかがはれた。藤村は臨終の日に——

「あゝ、涼しい風がくる」

とひとり言のやうに云つた。それが最後の言葉だといふ。これは好い言葉である。ゲ
エテは、最後の言葉として「Dear Lichi」(もつと明るく)と云つたといふ。ゲ
エテの言葉はいかにもゲエテらしく、藤村の言葉はいかにも藤村らしい。乏しきが中に
足ることを知り、天より與へられるものを、全身をもつて受ける、そして即身そのま
ま涅槃に入る、まことに東洋の詩人らしい其の氣持は「あゝ、涼しい風がくる」とい
ふ言葉に籠められてゐる。下手な句で辭世などをこすよりも、かういふ好い言葉の
方がどれだけ好いかわからない。——

客を待つ

荻原井泉水

私の家には、べつに客間といふものもないので、平生、不意の客が来れば、居間の中に招び入れて蒲團を出すだけのことはあるが、今日は特に招待して客をすることにしたので、朝早くから居間の片付けをした。

一體、客をするといふことは、茶道では大事のことにしてある。先づ、茶室の飾り付はもちろんの事、露路の打水にしても、あまり早く打てば乾いてしまふし、おそくて濡れすぎてゐるも失禮になる。だから茶會では、客に時間を守つてもらはなくては不都合となるし、主人も、時間をやきもきとするので、そこにキチンとした氣づまりもある。私のところは、もちろん、茶室ではなし、隨つて露路もないが、門からの通路は、けさは念を入れて掃かせておいた。床には何をかけようかと考へたが……。淨庵、木庵など、ひそかに名幅と自慢してゐる軸物を持たないでもないが、私はむしろ「名」に依つて見られるものでなく方がいゝと思つたので……

雲出洞中明

前野峰天祐叟書

此の一行物をかけた。此の筆者、天祐といふ人は禪僧に違ひないが、人名辭書を見ても、同名の人二三はあつて何れとも判然しない。然し、其の書は、素朴にして雄渾、氣宇の宏大なることが紙幅にあふれてゐる。花は……。花屋は近所がない、又、花屋の西洋花でも落ちつかない。上のお寺の山から百合を一本もらつてきた。それでいゝ。

それから私はいつも居間の床の間に置いてある佛がんだの置き物だの、さういふものをスツカリ取り除いてしまつた。物をゴタ／＼と並べておくのはコトウ屋の店先のやうで、うるさいものである。物を飾つておくよりも、平生飾つてあつた物を取除いて、空白にしたところに、却つてのび／＼とした氣持があつて面白いのである。家内は、寛の屏風を出さうかと云つた。これも見たいといふ人は見てもらひたいものだが、これ見よがし、並べるのけ異くるしいらう。私は、それはやめた方がいゝと云つた。さうして、それよりも今日は簾を念入りに掃除しておく方がいゝと云ひつけたのである。

小言

獨學といふことは先づ無しに學んだといふことではない。特定の先生に就かずして、教へきぬほどに多數の先生から學んだといふことなのである。

何が安いと云つて、當今、學校の授業料ほど安なものはない。だが、考へてみると、やつぱり値段だけのものと云ふべきであらう。

今日の學校は教科書が無くてこまつてゐるさうだが、ほんとうの教授といふものは教科書無しでやるのが一番いゝのではあるまいか。

學校はりつげな風格をもつた先生さへ置けばいゝ。時に、生徒をして、その先生を訪問させるだけで十分である。

その次には、好い圖書館と好い運動場とを作つておけばよろしい。教室といふのは有つても無くてもよろしい。

私がアメリカの一學を視ていちばん懸心したことは、圖書館の庫の中でも自由に讀書することが出来て快適な肘掛椅子のおいてあることである。

浅間山麓

萩原井泉水

けふからは 窓に浅間山と 月は 別の方から出て その夕べ
かつこうや 時鳥や 古い木の椅子と どういすと 置いてある
ほととぎす鳴きたすころの 風呂へは 丸木橋 わたてゆく
しらかんばは白し 風がもう 夜をはなれて ぐくぐ
松の中の しらかんばの 四五本も 月になるらしく
雨がパラ／＼としただけで ひでりばたけの これは豆畑
豊蔭どきは 浅間の なだらかな線 横になる
いちにち 暑くて すつかり かげつた コツプの やぎのちち
雨々も 浅間のむこうに にげられてゐる いなすまする

日のさかりとなつた あるじの 遠くの 鉄の音が
ひでりの 夜露じめりの とにかくも そばをまく
赤子 寝かし ある そこを そつと通り 日のさかり
ごんにちわと 云つても やぎのないてゐるばかり 日のさかり
暑さも くりやで 何かさざむ音が 三時になると
やぎは つないであつて 葉いちめん 豊蔭さめておりたつ
浅間は雲もたなくて 夕日になると 白いやぎのちちをいぼり
ステツキ、つゆけく 背い路が なくなると 路がある
たゞ青くて 遠いラヂオの どこにも家は見えないもの かつこう
みんな 起きてきたばかりの 顔に 川が流れてゐるところ
朝は 宵葉ふきおろす風の どつと 朝日

添へ

「ほととぎす」といふ鳥は、俳句の季節では名物のやうになつてゐるが、聲を知らない人が多い。知らないまゝに、想像で作つてゐる、が多い。ほんとの「ほととぎす」の聲を教へると、あれが「ほととぎす」とは思はなかつた、あれなら自分の村でいくらでも鳴つてゐるといふ人もある。此の句は、そのほんとうの「ほととぎす」をつかまえたつも、ではあるが、その作者の一人がつてんかもしれぬ。「かつこう」といふ鳥は、東北の方へゆくと、人家の近いところへ来て、デンシンンボウとまつたりして鳴いてゐたりする。「ほととぎす」も「かつこう」も、ごくありふれた鳥なのである。

「しらかんば」は信州に多い木である。普通「しらかば」と云はれてゐるが、「かんば」といふのが正しい。又、土地で「さう云つてゐる。かんば」といふのは、さくらに似た木であるが、花はさびしく見て見どころがない。「しらかんば」は、木の肌が白くぬつたやうに白くて、どんなところにあつても、よく目立つ。月の光をうけると、白く光るので、林の中などではうす氣味悪いやうな感じもする。

浅間は火山ではあるが、傾斜がゆるやかで大それたつくりとした山である。それに當時は噴煙もたえてゐたので、おだやかな感じにして朝夕観まれたのである。

麗日壇

井 泉 水 選

内 島 七 朗

汗がおつる。土を蝶々がとんでゆく。時に夢からが火になつて子供たち夕暮じやがいの花白きはたけ家の中時計打つ窓の外の花を一筆はがきにして頼むちやぶだ。い何か食ふ物があつて親子がはだか鐵に火花をちらしてゐる。南瓜、水がうつつしてゐる。のが、春日をなくした蝶が、花が影をなくしてゐる。月夜の、月のくらいとこゝろで芽がひらくのをあめんぼうにあめんぼうのつてはなちる。海にかい空が梨棚の花少しのことつてゐる。ざくろの花、わらややどをしてゐる。青ちそこまきまきみ入れるにほつと灯がつく。子供そとにゐて夕べは物の煮える間。天子さまおそろいでみんなへ曇り日の帽子をとられて。白い皿一枚一枚へトマトだけのいろで夕べあかぎ伸びるだけのその日の夕日に染つて。柿木とコスモスとそんなくらしもすずしい。日永しやわらかな土にしてゆく。

松 尾 敦 之

秋 山 秋 紅 夢

給 木 月 々 虹

山莊雜記

井 泉 水

八月の二日から此の山莊に來てゐる。此の山莊といふのは、信州輕井澤のうちだが、香掛に近いところ。草津街道にあつて、昔から知られてゐる。鹽竈温泉のすぐ上である。層雲の社友の高橋妖佛君の別莊として、いつも別莊番夫婦が番をしてゐるだけ——そこへ夏のうち來てはどうかと云はれて、そう長くもゐられないがでは御厄介にならうと云つて、來たのである。

鹽竈といふところは淺間のすそ野で、輕井澤の驛よりも高く海拔一千メートル。一面に疎林におははれてゐる。その林が今は全體に茂つてゐるので、樹海といつた風だ。その間、あちこちも小徑がある。小徑を行くと、低い石の門がある。傍に高札風の門標が立つてゐる。と姓とが横書にしてある。そんな山莊が茂りにうもれたやうに、屋根だけを見せ、點々とある。この山莊もその一つなのである。

私は毎朝五時に起きる。そしてステッキをさげて散歩に出る。茂りの中の小徑を、足のむいた方へあはる。ステッキのむいた方へ——と云つた方がよいだらう。山莊が一軒、又、一軒とあつて、それから

この家の設計はよろしい日がさしてゐる梅夏を机の微分積分の書とグラデオラスの花先生へ朝のあいさつするほどの齒がうつくしい街角がすみといへばかすみ雲といへばその中の遠山の雪かこの山雀へきけてをるつぐみの聲がまいたまかぜがちらすのでたかいたころでさいてゐるしづかにおしえて裁縫の時間の遠い山のかつこうとめてもらうとしてあやめさいるくさいてこどもこどもとねてふるさとはほととぎすがなくやねかはに草のみちがそひつゆばれ音が川の向うにかち屋がある雨上つてゐる水かさ新しく女は女のわらぢはき朝を青葉にしてゆく大きな柿の木の下ふき畑とその横の倉とおばあさんと朝うれむぎにときに急に月があかるかつたり一人でゆくさんばつも家でもらつてながい一日が裏のざくろの木月がどこかに月あかり海の岩すずしいおまつりふうせんすぼむときふえ水に石の橋、からつゆではなくてふる木のあめがしづくする木のなか、橋月を顔に女がネクタイ直してくれる月あかり本を集めてひらいて研究夏となつてくる

目ざかりくろい洋傘さしてどうでもあはなきや遠う山なすびいろしら雲少しのせて六月とちの花日やけの顔を笑うてうつ、くしい

加藤 裸 秋

三好 草 一

田中 井 夢

大越 吾 亦 紅

は絶えてないと思うとどこか屋根は見えないが木の間からラデオがきこえたりする。水の音がしてくる。きれいな流れがある。その流れに沿うた小徑が好ましいので、それについて川上へ行くと、いつのまにか徑がなくなつて青葉に包圍されてゐる自分におどろく。木つつき鳥が、すぐ目の前の木で音を立てゝゐる。ギアギアといふ聲で、め、らしく人間を見たやうに鳴く鳥が低い枝に居る。下枝にある草は——草の名に關しては至つて知らない方だが、私を知つてゐる草では、女郎花、男郎花、撫子、ほたるぶくろなどが咲いてゐる。萩もチラホラと咲きはじめてゐる。かうした小徑を、ステッキをふながら歩くことはじつに楽しい。これは夏でなければならぬいし、又、朝でなければならぬ。さうして、これは旅の氣持ではいけない。自分の家を出て、一寸散歩してくるといふ氣持でなければいけない。だから、コウモリ傘を片手にではいけない。トランクを片手にでは、猶更いけない。手にはステッキ一本をもつて——此の氣持にかざるのだ。しかも、そのステッキは平生愛用するところのステッキにかざるのだ。

今度、家を出る時に、いつも旅行には持つて出る手まわりの物をボスコンバックに入れて、其を掲げると共に、立脚の傘立にいつも立てゝあるステッキを持つて出ること忘れなかつた。家内が——汽車

ほんの月夜の通り雨で竿竹いつはん夏
女荷を頭に出おりてくる雲も夏のかたち
音は川の砂の流れる月見草月になりゆく
雨が風が雨戸をたたたくほどよる
朝が早いどころも二階があり花さく青桐があり
なんとなくさて折返す波、見てゐる須磨の夏の日夕べ
芋の曇る鉢も雨雲はれゆく山が一連
次がかいでゆくいろの草の道がまつすぐに夏
わらんべたち夏秋をもつ此の道その寺にゆく(高台寺)
川の底を流れて砂春めく
歩くに汗ばむころの青柿の落ちるころの雨
うたばかりをきざんで目にしみる玉葱
病みながらも病む兒を看護してゐなざる團扇
愛宕の雲が夕焼するころで熱れたトマトの味
唐もろこし、穂に月が出て月が青田を明るくする
山鳩なげ寺のくぐり戸のうちの白い障子(層雲社)
ふすまのうち乳のみ兒のをらるる山鳩なき
おもちやの筒れひにきてその筒をいりてゐるこども
えんじゆ一木まつりの夜の風の流れてゐるにて
夜をばらのかほりするかほをそばにしてゐる
ふたりひとしきうれひをもち月はあかるし
べにのついた吸さしが煙つて宵になつたばかり
ある愛情の終焉といつたやうなべにさしてゐる空
鍛冶屋かねうつ親干で五月の空あさみどりいろ
峰のあつめたあまいものはかめたなしてかなかながすぐ山

小谷信夫

堀 英之助

林 木衣樓

井手逸朗

岡野宵火

藤澤せいじ

の混雑する中に、ステッキが荷厄介になろうし、又
きつと忘れて来るにちがひない、と云つて留めるの
だつた。私は——家内はきつとさう云つて反對する
ことは解つてゐたのだが、それを押し切つて持つて
きたのだ。それは、云ふまでもなく、朝の散歩にス
テッキがなければならぬことを考へてゐたからであ
る。

散歩の道は、若し目的を置くならば、手が滯まで
とか、グリーンホテルまでとか、行つて歸るのに
も、さして遠いところではない。だが、散歩といふ
ものは、目的のないところに面白みがある。目的が
あつては、既に散歩ではない、と云へよう。私は、青
葉の中、迷子になつたり、青草の上にシヨウベンを
したり……うだ、あだかもイヌのやうに……イヌ
が青の匂ひをかきまはるやうに、匂ひを……いただ
けで満足して歸るのだ。

——毎朝、銀のやうなシヨウベンをする幸福
これは勿論、匂ひは、いかに、この言葉を私は青葉の
はしに響きつけた。歩きまはつてゐるうちに、朝日
が出て、シヨウベンがきら／＼と銀のやうに光る。
とにかく、今日も健康であり、今日も仕事が出来
るといふことの幸福感なのである。

晝のうちには、やはり此處も暑い。だが、汗の流れ
ない程度の暑さは、私にあつては快適感である。家

疎開のすみついて日ぐらしどきの日がみしんの脚
よい雨がふつてゐるはだかにうちわ
暑い入いきれの車内で女と男である
芭蕉の千住子規の根岸も青葉毎日通う
窓から見えて桐の花空がとんぞこまでも青い

小澤武二

青蔭に古ぼけた汽車が停つてゐるだけ
まだ落ちる葉が落ちる音する
風が雨になつて夜を雨戸へうつ
きこえて秋が川音となつて流れてゆく
住む家の廣さが秋の午後の五時過ぎ
君も瘦せたなと云われたその顔けさは刺つてゆく
二人とはな妻と二つとはな世にゐて子があるかせる
わが生き振舞ひの妻子ときて海のうごく中で泳ぐ
うごかぬ川が流れてゐて橋の上で夏帽が日をうけてゐる
水は子がさきにのんで手造りのハンで遠足の木のかげ
春聯に目ざしも春の少年と日かげにゐる山羊
雪が青空のガラス戸に貼つてある二本のカラ
つゆ草のむらさき蜜にしてちよつと横になる
エンジンの構成をこの朴訥の青年達と楓の若葉
荒海の鷗もしけもよりの湯町の魚根のアンテナ
葉ざくら寫る前の顔をしてゐる

芹田鳳車

梅が青い實を見せて窓風があると英和辭典
朝が白いワンピースで立つぶどう棚のぶどうの房
夜の電車風入れて走る少女の胸のふくらみ
月夜へ散會して道のまん中話してゆく

橋本夢道

東松八洲雄

渡邊さとる

を出る時、京都の層雪社から、句稿の追加分の小包
が一個到達した。その選を急ぎたのむと、葉書は
前から来てゐた。私はその小包をそのまゝポストン
バックの中に入れてきた。此の山莊に来て、第一の
仕事は、その選である。

句の選といふものは、コレだけのものをイツまで
に爲なければならぬ、となるとその大きな量の前
にウンザリすることもある。だが、氣任せにゆる
／＼としてゐればタソシミなものでもある。それ
は主として「心境」でもある。そうして仕事の「手
順」でもある。私達の仕事は、氣が向かなくてほう
まく行かない。と云つて「氣」の向くまで待つてゐ
たのでは、常にメイワクをかけることになる。そこ
で、自分の「氣」に自分でサッピをかけて「向く」
やうに「向けて」ゆくことがカンジンである。それ
から少し向いてきた時には、それにアブオをさし
て、ます／＼動くやうにハツミをつけることがカン
ジンである。何事にでも、此のハツミといふものは
大切である。

石臼をひく話をきいたことがある。石臼で粉をひ
く時、一気に半圓周以上にまはれば、そのダリヨク
で、容易に一周するが三分の一ぐらいのところ
つかえてしまふと、力が小さきみになつて、一々に
リキまなくてはならないから、手ばかりくたびれて
しまふ。それから、臼の目が上下ピツタリ合つてゐる

ト、ト賢をむすんで朝は早いうちから母上
すつかり辭職のこと了つた晝月が青葉にあるなど
干してある魚ついでみにくる鳥のここに住みつく
二三軒農家がついてゐて不許量酒と蟬ないてゐる
雲のかかる雲のはれる山がならんで今日から田植
ふる雨あかるくうれ夢のいろ
その雲の風であるうす日のけやき
棕櫚がきいろい花ふいてゐた日のよるである
はれまの草に水かさの橋のそばの停留所
水にとぶてふてふを盡にす
厨へ玉菜一枚一枚むく音すすし妻と
梅雨があがつたガスタンクとレールの上の橋
朝霧がはれてくるのが牧場の柵
甕柱、暮れはじめると暮れかけてゐる雀色時
ジレプへこどもが驅けてゆくので夏の風景になる
月のあかるさ家の間に落ちてゐると咲いてゐる
みんみん蟬もしづかな瀬の口にもどりくるる拍子そろえ
蛙鳴いて月に光りのでてきた水田一枚
めじろかごおいて笹がさやさやするので早春
青葉の、下座の方が涼しい二三人のそば（高台寺句會）
瀨田の橋も青さの中湖の方はつゆの日さしてゐる
あんなところにかがやみあり夢うれてかつこう
三歸來なら摘んでためて冷たい匂ひが一ぱい
濱撫子と岬のとつばなひとり
夢秋、醉賣は醉壺抱へて來る

石田白麿子

藤野香紅花

井上充夫

橋本健三

飯尾青城子

山本木天蓼

大山澄太

江良碧松

ればいゝが、さもない時には、笑から入れた豆の一
粒々々が目をはづれて外へ飛び出してしまふといふ
ことだ。俳句の一句々々を選するのにも、此の豆の
一粒々々をひくやうなコツがあるのである。

暮方になると、私は温泉へゆく。それは、裏のハ
タケの中の小徑を下へおりと、すぐお隣が隣温泉
泉宿なのだ。土地の言葉では、これはショツツボと
發音する。昔、草津へ湯治に行つた者が歸りに、こ
ゝを「仕上げ」の湯と稱して泊つて行つたものださ
うな。湿度は大そうマルクで、沸かしてゐるのだ。
それに、附近の山莊の者が皆はいりに來るので、セ
ントウといふ感じが無くもないが、沸かした湯にせ
よ、湯口からたえず湯ぶねへ落ちて、あふれてゐる
のだから、温泉には違ひない。この宿の玄関に郵便
用の大きな状差があつて、出した郵便はそこへ挿
んでおく、又、着いた郵便もそこにまとめてあるの
で、其中からさがし出す。だから一日に一度は、此
點からも湯に行く必要がある。

私が山莊に來ると共に一頭の山羊が引いて來られ
た。これが私の爲に、毎日チチを出す役目をしてく
れるのだから有難い。山羊といふものは人なつこい
目をして、風雅なヒゲをはやして、カワイイものだ
が、此の鳴き聲だけは好かない。然し、此の山羊は

生き残るといふことは淋しい露のとち花になつてゐる
 どの傘も破れてゐてなが雨が雨
 梅雨ぞらに星が見えまだあらかべの匂ひしてゐる
 雪の田圃からどじょうとつてる青いどじょうと空
 お星さんが出て来たといふ人聲幾あど
 馬がうまれて駮のうしろが笛
 やつと返事がきて桑の實いろづいてゐる
 海のかもめ田に来て白いかもめでゐるなが雨
 茄子には茄子の色が夕べの空の色がはつきり夏
 十薬が花つけた灸すえてもらつてゐる
 京に来てゐて京の雨夏になるのをあくる
 日ざかりほりぬき桃三つ四つうかしてあるとお祭
 よるの山が、啼く虫へ部屋のみぎすのまぎれすなくを
 家あり男手を後に夕べ涼しく青田みてゐる、というふうな
 すずめのことえ元日のかはやにゐる
 元日の裏山の土ついたごぼろをもてくる
 焼けた東京、焼けない東京レインコート着て出る
 朝の日さして菜種畑の種となりたるさま
 麥は刈るばかりなる藪のあめ
 蒸れ麥に降るあめは屋根にふる雨
 湖のにごりもやや日ののびし船のふくふえ
 椿木のなかに咲くときがきて咲いてゐる
 からすあるいて橋をわたつていつた
 風が木を吹いてゐる村が見えてゐるあるく
 くびに手拭まくと山芋掘の恰好になる

杉田作郎

小林銀汀

柳田流矢

木戸夢郎

池田詩外樓

井上一二

財馬阿歩

木村緑平

めつたに鳴かないので、いゝ。楓の木につながれ
 て、一塊の残雪のやうになつて寝てゐる。私はそれ
 をスケッチしたりして楽しむ。その時「動物」といふ
 ものは（家の中にあるネコなどは別）が……いっ
 つも「動」いてゐる「物」だといふことがわかつた。
 アアが来る、アトが来る、さうした虫に攻められる
 ために、しばらくもジツとしてをられないと見え
 る。その點で、動物といふものはカワイ、と共に、
 カワイソウナものだと思ふ。

山莊の主人、高橋君の自宅から千曲川の鮎をと
 けてくれた。私は、そのイキの好いのを早速にスケ
 ッチした。それか、晩食に焼いてもらうことにし
 た。ところがシホがアラジオしかないといふ。私は
 鮎の中に、シオを持つてきてゐた。それをアメリカ
 の試友から送つてくれと頼んだ。千曲川の鮎をカリフ
 オルニアの鹽で焼く。↑今後の日本はすべて此の
 行き方でなくてはなるまい。

關口父草がたづねてきた。父草其他、岩村田の同
 人四五人と共に、淺間山に登つたのはすいぶん以前
 だ、何年になるだらうかと考へる。大正の終か昭和
 のはじめだつたらう。小諸を夕日を浴びながら出發
 して、淺間館に泊つた。夜半三時ごろ、月光を踏ん
 で頂上をさした。提灯をさげた者もゐた。

川せみ、川舟にのりておわかれする
 新納香樹
 讀經、朝にしで青い梅の實
 中島山濠子
 南瓜の花咲いてゐる朝がかりと明けてゐる
 相京崎樹
 乏しいお供物でお盆の佛様へかねをうつ
 ひるから晴れるといふ空で降つて、苗床の苗
 一羽へ一羽の飛びそうて白鷺の、沼のさざなみ
 波部 枳
 水田の向うの海荒れてゐるを話す
 小原甲斐
 摘んで幼子にやる幼子それを捨てる三ツ葉のはな
 影するものもなくて鱧あと日まわり
 齋藤てつ人
 荒壁つけた家が春の日の中
 水音明けてゐる青梅つゆけく落ちてゐる
 横關碧樓
 最上川すみて流れていくまがりの又ここに夏がくる
 梅雨の名残りといつた雨が實になつたざくろを穿する
 三宅安二
 木が二三本と瀾のあつてまわりがもう田植えごろ
 よべも今夜もよか月夜のしようぶの咲いて
 そら豆ごはんとくだけはとれたよお母さん
 浄心寺 傳
 さくろの花が赤い家の二階借りて移りて今日雨
 お茶が出るよと一服野茨が空罐にさしてある
 青木青華
 えんさき十薬の花の十字が梅雨のはれ間
 百合の花は見えて草刈る鎌の音するばかり
 甲子 裕
 燕 去 ん た 軒 の 朝 を 掃 く
 鶏 の 抜 け 羽 が 風 吹 い て 行 く
 灯つた街のすぐそこが海、口笛でゆく
 天沼 棗人
 山では郭公郭公、女達は機織つてゐる
 吹雪おさまれば山川のかたち雪をふみゆく
 皆川 夢二

谷の底にも月さしてゐる水音
 頂上に着いて御來光を待った。

しづかにひんがし明りくる機の一とところ
 その時の句はまだ薄山あつたが、覺えてゐない。其
 の時代の句集には出てゐる。

父草がキウリを風呂敷につゝんで背負つてゐて
 (其頃はリユツケサクなどはまだ無かつた)途中
 で休んでは皆がナマのまゝ、そのキウリをかじつた
 ことはおぼえてゐる。宿の風呂に私がいつたとま
 る、ぬるいので、分草が大きな木を拾つてきて焚きそ
 へてくれたそうなる。その父草の話は、私は忘れてゐ
 る。

山口草露がたづねてきた。彼は靴下の製造を業と
 してゐる。アメリカでは戦争以來、ナイロンの生産
 が非常に進歩をして、日本の絹の靴下の需要が激減
 したといふ話をきく。なほ、草露の語るところに依
 ると、ナイロンは大それた美しい「きれいだなア」と
 感嘆するやうな美しさである。それに比較して天然
 の絹は「おくゆかしい」と云つた風の美しさである
 此の、いはゞ一種の「さび」をもつた美しさといふ
 ものは、アメリカ人でも、理解する人は理解するけ
 れども、一般人の目はナイロンの方に引かれるの
 致し方ないことである。云々。

冬としては海のしづかな岩のり採つて籠にもり
野火燃ゆる野のひろびろと天日天にあかくあり
いちにも飼いた馬が物食む音の春夜の静寂
ゆきげいちにもちくれてとけてゐる
春とて風がさむい星一つ 夢ふんで歸る
はげの新芽が鳥のつばさの紅さで妻と別れてゐる
今朝櫻桃の花は藁屋の庭にも段々畑にも見ゆる
梅雨ばれとなりも 梅の 實熟れてゐる
勅封千年の落葉してゐるそれを仰ぐ(正倉院)
梅 雨 が 月 夜 と な り 雨 天 の 花
おへんろさん松の根つこがあたたかい春
焼 跡 青 物 青 く て 焼 場 へ 近 道
まけば芽が出るせまくとも自分の家である
あめがはれると松のなかきのことりわたしもゆく
しものあさのしづか四つであみにぼらがはねるわ
枝からほろりと舞うて舞うて晴れてゐる
さくらが青葉になつてアメリカをばこ
いかになりゆく世のさまか朝の顔ふく手拭の穴
引揚者二組バズを下りそれぞれ村の火の見の冬空見あげた
月で出るとまた曇つてきた 道石ころ 道
炎、天、棺と人焼く薪が一つの車でゆく
村 の 灯 が お 盆 の 竹 藪
一日高懸線が通つてゐる空と製材所と蟬が鳴いてゐる木
幼く抱きし吾子のけふぞ白木の箱をむねにす
もう田から水おとして月夜のみ のり

増村辰郎

下山一水

矢内樹一

泉 恩 三

三浦香女

金平二火

細谷ノヅキ

小西佛舎

善方牛臥城

福山溪水

植田市籠

一色如佛

牧野富太氏の「植物記」を讀む。その中にムク
サキといふ植物に就て――

昔は江戸紫などと稱へ、紫の色は「紫」の草の根
で染めたるのだが、今日では美麗 新染料に壓倒
せられてしまつた。私は以前、秋田縣の花輪の
町で、昔風の紺屋に染めさせて見たが、現代の紫
に比べると、その色が汚れない。然しなか／＼奥
ゆかしい色であることは受合うておく、大意。

これもナイロンの談と同じことである。陶器に於
ける奥須の味ひとコバルトの味ひとの差もこれと同
じである。すべて、自然から直接にとつて加工した
ものは、自然のもつ好き味がある、何となく深 美
しうがある、それはサビのある、奥ゆかしい、いは
ば雅致といつた風いものである。之に反して、工
的に製出したものはバアツとした美しさである。奥
行はないが、人の目をうばうところのミリヨクがあ
る。此の兩様の美しさの指標の差は「東洋風の美」
と「西洋風の美」との差とも云へよう。日本の將來
には「西洋風の美」がますます流行しようが「東洋
風の美」の亡びることはあるまい。又、西洋に於て
さへ、東洋風の美を鑑賞する目のある人は、それを
非常に高い價値を以て評してゐるのだから、一種の
「東洋藝術」として、これを西洋にひろめて行く道
は必ずあらうと思ふ。

(八月七日)

水橋林みづみづしく赤城あまの雨ふり
 山の木の芽がお豆腐の上につてゐるだけで
 干しものにあたる日が午後になつてゐる一本のダリヤ
 どうにか過してきたことも古いふとんの花のもよう
 朝をじよろの口からでてくる水を
 のぼつてきてむかうの山の雲である
 迷彩も忘れたような工場が月夜となつたばかり
 椿の心へ蜂はいつてゆく見てもこのころおひより
 穂をつみとつてからの黍が吹かれてゐる畑で
 去年の合頃は焼け出されてゐた、鉢に映かせてゐる
 しをんの花だまつてゐれば君もだまつてゐる
 まどのやみをほだるがとほつてからかへることにした
 口笛ほうほけきよと吾子抱いて歩よく
 石切る音も雨上りの藪の鶯
 しづくしてはになるあかるいあめ
 若葉、枝のさきがあかるい夕日になる
 日のある月のあるすこし畑にして家の前
 手をのばせば手の届く一冊を手に、お待ちしてをりました
 草刈り干してある山のまつたく満月
 町はまだ明るくて灯り青葉にあめ
 土が芽をだしてよいおしめりだ
 杉山の雲が白い夏の雲になつてゆく空
 女かみすく青い葡萄はすつばさうにさがり
 花火の音は天子さま京にゐなさる星ぞら
 けふはひとり赤いつつじ白いつつじさいてゐる

巢山 咲魚

小牧 二郎

降矢 百蜂

木村 いわじ

名雪 理輝

山田 こころ

小林 未未鳴

角田 重信

河重 夏涼

米倉 久枝

白石 黙忍冬

上柳 小平

照井 燈光

隨處爲客

井 泉水

輕井澤追分宿に河村龍興君をたづねた。君が此の
 草深いところに疎開して農耕を始めたのは、まだ戦
 争がジャン／＼とやつてゐるころだつたらう。君の
 専門の彫刻などは、需要の點からも資材の點からも
 全く行きづまりの状態になつたので、君としては思
 ひまつて轉身をする氣になつたのだらうが、それに
 しても好くまあ決心がついたものだ。當時、私は思
 つた。同時に又、六十近くなつてから、初めて鉄を
 執るといふ百姓はどんなものかと、ひそかに危ぶん
 で想像もしてゐたのだが、今度、来て見て、それが
 すつかりイタについてゐるのには感心した。もつと
 も、これほどに落着くまでの苦勞と困難との誤は、
 聞いてみれば一々ナルホドとうなづかれることばか
 り。そして、農耕の生活といふものは、ナミタイテ
 イのものではないことがイカエモと合點される。茅
 葺の住宅は大工と左官を相手に君が自身の勞力で建
 てたものだといふ。その縁には刈入れた麥が架に
 掛けて干してある。さつそく其を片付けよう、さう
 すると、坐つて居ながら八ツヶ嶽が眺められるから
 と君は云ふが、さうゆつくりはしてゐないからと私
 はことわつた。水田は初め作つてはみたもの、地

月がもうだれもとうらない月になつてゐる
 灯にふる若葉のよる
 花をとうる雲が月夜
 雨が輪を書く輪の中雨ふり
 月に願をねがえりする
 てふてふぢやがいもの花にゐる
 と小さなお堂といつぱん松のかつこう
 花どきの浪音、メガホンが清い一票乞う
 きよう春祭の山から日がでる笛がしし舞ひになる
 風が出てきた夕暮れの波である巖にさくら
 朝の微風が髪をふいて學問する淋しさはつなつ
 遠い波おと夢畑のなかは夢の匂ひする
 水のなかの白い花のような愛情
 はなをかべにひげそつてくれます
 きにほしがでましたおまつりたいこ
 あさりうるこえもあさのすずしいうち
 つきよのうさぎが二つ白くねてゐる
 ひさしぶりのあめがやねにはたけにふつてゐる
 あさはすすしくていつもみてるやま
 一羽ゆく夕べのそらのよろしき夢の青みわたり
 試験管ちよつと日にすかしてきて話しはじめ、久瀧
 床やの鏡もつゆぬちの青い蛇の目で通り
 橋をあるいてくらくなる海のやけあとほたるうり
 花火が遠い空の子にはける下駄をそろへてやる
 流石から尾をあげしづくするをふく

原田赫城子

堀切春扇

岡村赤青葉

島山實治

木庭立夫

武田桂

櫻田輝郎

印南健治

井関冬人

遠藤虹水

品川幸一郎

物部卓郎

味が悪いためにどうにもならず、今は難澁を主として作つてゐると君は云ふ。「豆だけはエジマンらしい。海苔豆といふ、自然に海苔の味をする豆をいつて出された。座敷の中には、漆黒のつや／＼と照りはえたピアノが一臺あり、君のモデルであろう毛並のうつくしい猫が一疋ゐる。そして、自作の俳諧横物の海老の圖が壁にかゝつて「清風自ら來るの處」といつた感じである。

×

だが、日中はなか／＼曇い。此の照り込みの爲に
 稻田は甚だ好望らしいのだが、一月あまりも雨の無い爲に、畑物は甚だ悲觀すべき有様だといふ。大根をまかなくてはならず、ソダをまかなくてはならないが、土がかように乾き／＼つてゐてはどうにもならないといふことだ。アメリカならば、電氣のスイッチ一つひねれば、人工の雨が下から降つてくるのだ。日本の「農耕」といふものは、あまりにも原始そのまゝであつて、或る意味では「風流」だけれども、そこに「科學」を導入して來なければ、どうにもなるまいと思ふ。「風流」と「農耕」とが矛盾する談としては……

×

「露草」といふものは、俳諧にかいても面白く、俳句の取材としても、カレンなるうつくしい草だ。だが、これは畑のギヤンダみたいもので、ワイフに

今晚はぐつすり寝るよとそれきりに眠つた雨おと（長男死去）

富永谷衣

云ひ残すこともなかつたさし、がうまい夕べそれきり
極楽も暹羅の散る道の薄暑であるうか
らんまんとさきみちてしんかんと春ひととき

松田勇

セイラー服である頃のアルバムなどを一寸淋しい妻であつたり

青葉ともつてゐる交番の一人ですすしいお巡りさん
若葉の風が息づまるほどな頂きに立つ

松村邦夫

信號燈が澄いろにつきそめて日のいる山があり

寺の花畑雨はれたしげらくはかつころ

青まさよし

今日は今日の朝の日あたつてゐる柿の若葉

すつかかり芽が出たの山風

岡田浪干

風に散つてゐる山櫻山の學校

こまごま書きおくることこのこめ花まだふつてゐる

吉田六郎

降るでもない夜あけが果樹園いつばいの花です

夢られる匂ひの月がだんだん月の色になる

松に夜の白い雲を風鈴屋が荷をおろしてゐる

木村幸雄

あけてはれて枯れてながれてゐる

追憶の月より明るい具がら拾つてゐる

佐藤専子

枯あし、影が雲の影であつたり帆ぶねがきたり

さくらちりだすと散りやすい日さしにあつて塵取げこ

荻原荻

もどつてきてうちのさくらの花びら、羽織をたたみ

編む手が編みながら話があるといふ

粟が黍が葉から穂からしづくする雨をほめて通る

雲から出て十五夜の月であるくにの山である

田植終つた大和の國の山の線うつしてゐる

生えられたらば、なわな。抜いて捨て、おくと、
捨てられた處へいつか根をおろして、生き、へつて
ゐる、そのやうなオレセイな繁殖力をもつて、畑物
の養分を吸収してゆくのだが、これほど憎いべき
奴はない。といふことだ。「土筆」といふものけ春の
始めに出る俳趣ゆたかな植物だが、この土筆を生ぜ
しめるスギナといふものが、おそろしく畑をあらす
奴で、その根はかなり深く土中に喰ひ入つて、地下
ひろつてゐるのだから、之を絶滅せしめるのは
容易のことでない、といふことである。

龍興君は風呂をたくからはいつて行けと云つたが
私は豫定があるので辞退した。此の風呂でも、風呂
の流し場をためておいて、畑のかけ水にするタメが
出来てゐる。タメが満水になつてゐる間は次の風呂
がたてられない。私が近いうちに見えるといふの
で、そのタメの水を、らつて、用意しておいてくれ
たのだそつた。百姓の生活といふものと、友人、好
意といふものとは共いナミナミならぬものである。

岩村田に佐藤 風君をたづねた。君はハリを業と
してゐる、又、その道の名手として此の地方で知ら
れてゐる。私は、此の春ごろから右の腕にときん、
痛みがあり、右手を高く擧げることが出来ない。小
川部影君に診てもらつたところ、筋肉リョウマチス

このあたり木曾の木どころ一番汽車はきりの中いでてゆく
若葉が夏になりゆく煙突一本

矢島寒雄

桑の實黒くこぼれてゐて道の下學校オルガン
夕日のかげにありがゐて花が落ちとる
はざくらくれてくると今日試合があつた白いライン

小松さとる

梅雨がふる青葉のなか中學校の門
夏雲の遠くから白浪になる
夜になつても暑い山の向うに雷がある皿のくだもの

佐藤鈴村

月がない月見草咲いて誰も通らない
山に残つた一つの灯雨が朝までふる
汗で拓いたその頃のやつぱり蝶がとんでゐる

丸山素仁

短い汽車が時間で通りそれから日のながい椰子の木
ひとふり来そうな水屋の水台のしづく
朝日へちよいと笠屏風立てて飯にしてゐる

鈴木芋村

照りこみも申分ない祭のまんまるい夕月
富士が黒く暮れてゆく進駐専用車灯を入れて通る
つばきよあけて雪ふり

松田一男

落が廣くておりて鳥が二羽春めく
若葉の暮れいろも屋根ふかき家のいへうら
葉ざくら雨のかさかさみんな學校にくる

佐藤賢明

梅桃一時にさいてかんたいたいてゐる大工さん
はまなすの花と言う鹽とる人の管の笠

木村乙羊

青田はえんさきから風あるお嫁さんなる娘さん
白い少女のふくと青田から青田のむこうがむら

だこのことだつた。蓋し、老人にはよくある「五十
手」といふものだろう。こういふ病氣には、ハリが
好きそうに考へられるので、如風君に療治してもら
はうと思つたのだ。もつとも、ホンゴシに治療とな
れば、かなり連續的にする必要があろう、一回だけ
ではマネゴトに類しようが、とにかく、あの銀製の
細い神経そのもの、やうなハリといふものが、自分
の筋肉の中に、何かさぐり／＼はいつて行く時の感
覺といふものは、一種の氣持の好いものではある。

x

如風君の座敷には、雲坪の山水をかけ、又、鐵山
がかけてあつた。私は雲坪も好きだが、鐵山は一そ
う樂しめるといふ氣がする。雲坪のものは、山水、
四君子など（其他、猿や牛の型やぶりもあるが）何
れも所謂「雲坪風」に出来上つてゐる、そこが雲坪
の好いところであると共に、其以下のものもなく、
其以上のものもないといふタイクツ感も、そこにあ
る。ところが、鐵山となると、山水にしてもその一
幅々々が意匠を異にしてゐる、同一人のもつては
れぬ位のヒヤクをしてゐる。人物をかけば、或時は
雅氣オウィツ、或時は覇氣マン／＼、人を人とも思
はぬ響きぶりをして、しかもキマリどころはチャン
ときまつてゐる。靜物をかけば、その感覺はいかに
もみづ／＼しく、しかも之を現代の春陽會展に出し
てもい／＼と思ふほどのモダンニズムがある。それで